

アセスメントとしての学修行動調査

大学評価・学位授与機構

大学評価フォーラム

2012年7月23日

同志社大学 山田礼子

学士課程教育の構築が中教審答申の焦点に

- 「学士課程教育の構築の向けて（審議のまとめ）」

2008年3月25日付

中央教育審議会大学分科会制度・教育部会

2008年12月の中教審答申においても確認



- 「知的基盤社会」における大学教育の量的拡大（ユニバーサル段階）を積極的に受け止めつつ、社会からの信頼に応え、国際通用性を備えた学士課程教育の構築を目指す

質保証強化の方針への転換

- 従来の多様化・弾力化のあり方の見直しを図り、
質保証強化の方針の明確化
- 「学士」の品質保証を全面に打ち出しつつ、
「出口」・「中身」・「入口」を統合した一体的な
改革の提言 特に「出口」に関し、我が国の学士号
が保証する能力を明確化する観点から
「学士力」を提起



本学でも「ディプロマ・ポリシー（出口）」
「カリキュラム・ポリシー（中身）」「アドミッショ
ン・ポリシー（入口）」の明確化が必須の課題

中央教育審議会大学分科会 2012年 審議のまとめ

- 中教審 大学分科会 大学教育部会による
「審議のまとめ「予測困難な時代において
生涯学び続け、主体的に考える力を育成す
る大学へ」

メッセージ

学士課程教育の質的転換



キーワードの一つが
学修時間の増加

2008年答申から2012年までの 大学環境の変化

- 多くの教員が研究至上から教育志向へ
- 95% の大学がシラバス作成
- ほとんどの大学が初年次教育を導入
- 多くの大学がアクティブ・ラーニング手法とプログラムを導入



しかし

日本の高等教育への批判

- 産業界や社会からの大学教育の質や大学生への強い批判が存在
- メディアによる調査への回答者の60%が日本の大学はグローバル化社会に対応した知識やスキルを身につけさせる教育を提供していないと批判

日本の高等教育の質的転換の 必要性の背景は？

- 授業や授業外での一日の学修時間は8時間
- しかし、日本の学生の一泊あたり平均学修時間は4.6時間
- アメリカの大学生と比較すると低い
- 特に、理学、保健、芸術分野と比較した場合、社会科学分野等の学生の平均学修時間が低い

質を伴った学修時間の実質的な増加・確保を始点とした好循環

- 学修時間の増加



準備と深い学び

- 全学的な教育マネジメントの改善
- 教育課程の体系化
- 組織的な教育の実施
- シラバスの充実

学修行動調査とは？

アウトカム・アセスメントの方法

- ▶ アウトカム・アセスメント＝ラーニング・アウトカムを測定するには？
- ▶ 2つの方法の存在 **アメリカにおいても両方の組み合わせ**



例 クリティカルシンキングテスト&学生調査

直接評価＝ダイレクト・エビデンス＝**学習成果の評価**

内容＝科目試験，レポート，プロジェクト，ポートフォリオ，卒業試験，
参照基準としてのルーブリック，卒業研究や卒業論文，標準試験

分野＝一般教育，専門分野別

間接評価＝インダイレクト・エビデンス＝**学習プロセスの評価**＝学習行動，
生活行動，自己認識，大学の教育プログラムへの満足度等成果にいたるまでの過程

内容＝学生調査，卒業生調査，参照基準としてのルーブリック等

時期＝入学時，1年次終了時，上級学年時，卒業後

間接（プロセス）評価としての学修行動調査

- 直接評価で測定できないプロセス

学習成果に導くための学生像や成長度合の把握
実用化に向けて保証すべきところは？

妥当性と信頼性

○長期間での大規模な検証

○理論にもとづいた項目の作成 → 標準的な調査の開発

例 総合的なカレッジ・インパクト理論 → CIRP

Engagement 理論 → NSSE

間接評価（学生調査）は I-E-O モデルを検証する方法の
ひとつ

自己評価による学生調査の有効性についての検証

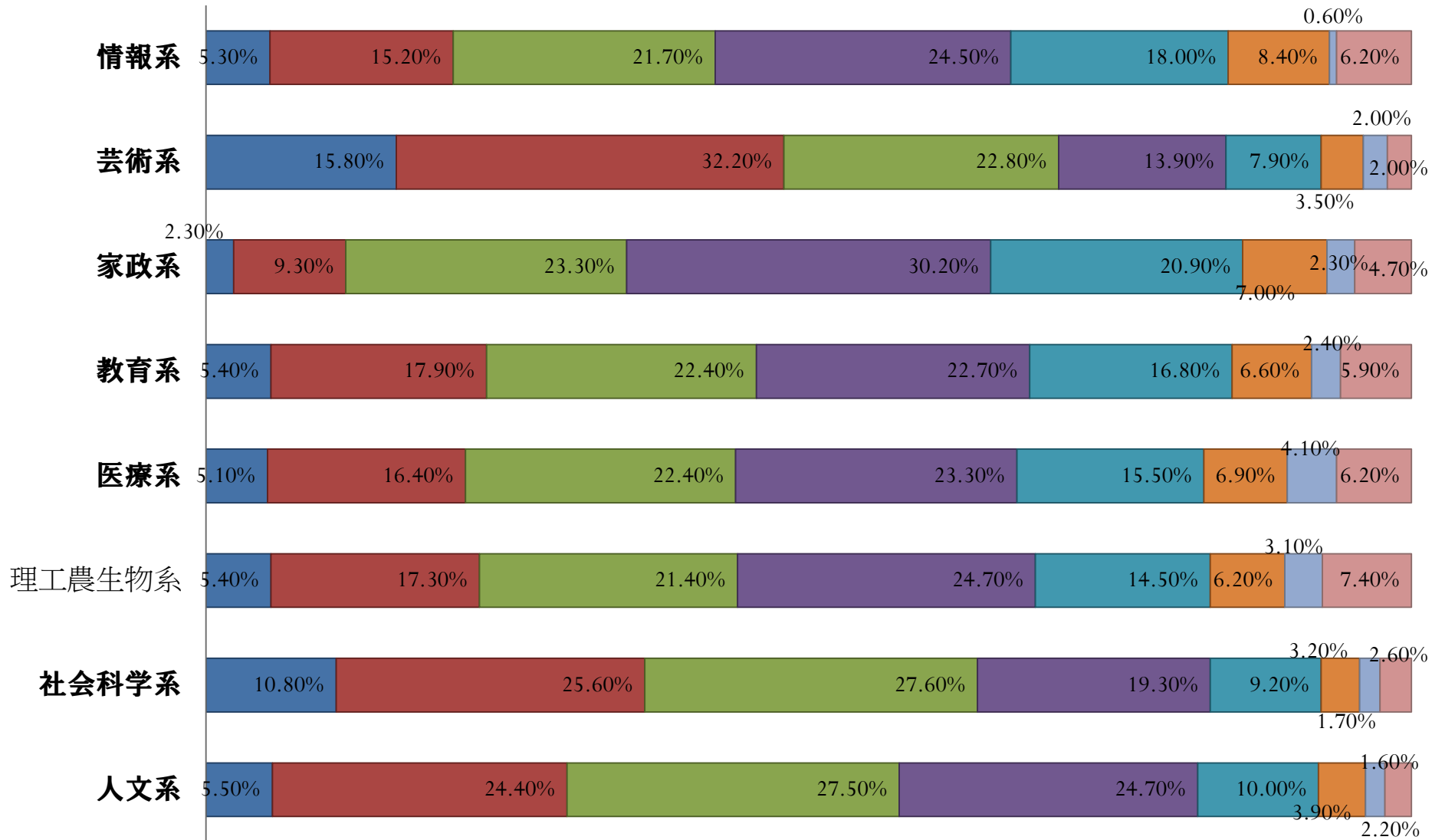
（Anaya, 1999; Carini, O_Day, and Kuh, 2002）

JCIRP継続データから見る学修状況

JCIRP研究のこれまでの目的と特徴

- 学生の成長を測定する学生調査の意味、学生の成長を支える高等教育機関の効果の測定の開発
- 研究の特徴：アメリカで蓄積されてきたカレッジ・インパクト研究の流れをベースにアスティンのI-E-O(既得－環境－成果)モデルに依拠しつつ、大学生への教育効果・成果について検討
カレッジ・インパクトモデルの検証と発展
- アメリカの学生調査と互換性のある調査の開発と実施

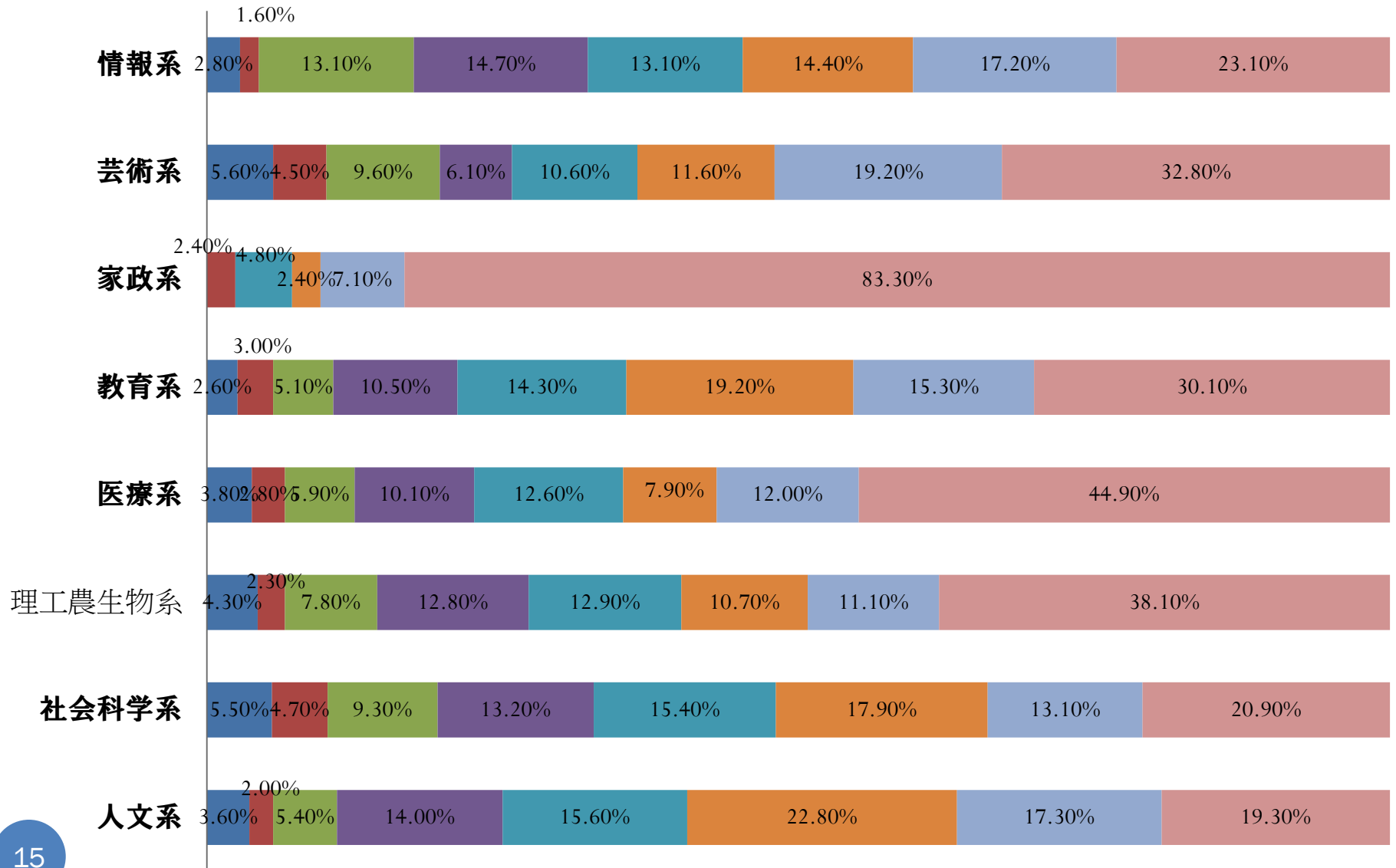
1 週間の授業時間以外での学習時間



■ 0時間
 ■ 1時間未満
 ■ 1-2時間
 ■ 3-5時間
 ■ 6-10時間
 ■ 11-15時間
 ■ 16-20時間
 ■ 20時間以上

1週間の授業や実験への出席時間

■ 0時間 ■ 1時間未満 ■ 1-2時間 ■ 3-5時間 ■ 6-10時間 ■ 11-15時間 ■ 16-20時間 ■ 20時間以上



学修時間と授業への出席時間

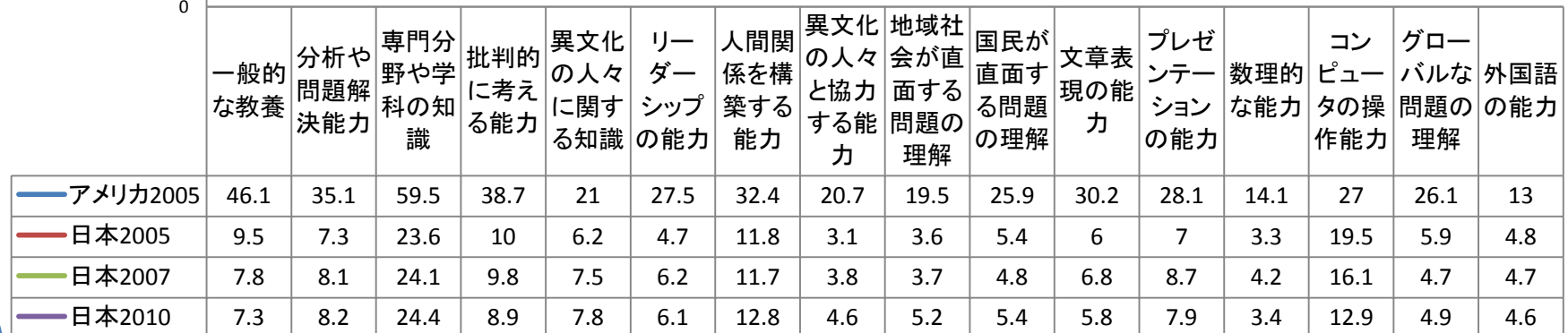
- 全体的少ないに学修時間
- 授業以外での学修時間が0時間である学生がいずれの分野にも一定の割合で存在
- 社会科学系の学生の学修時間が相対的に低く、人文系の学生の学修時間も同様に低い
- 1学期に履修する授業数が多い

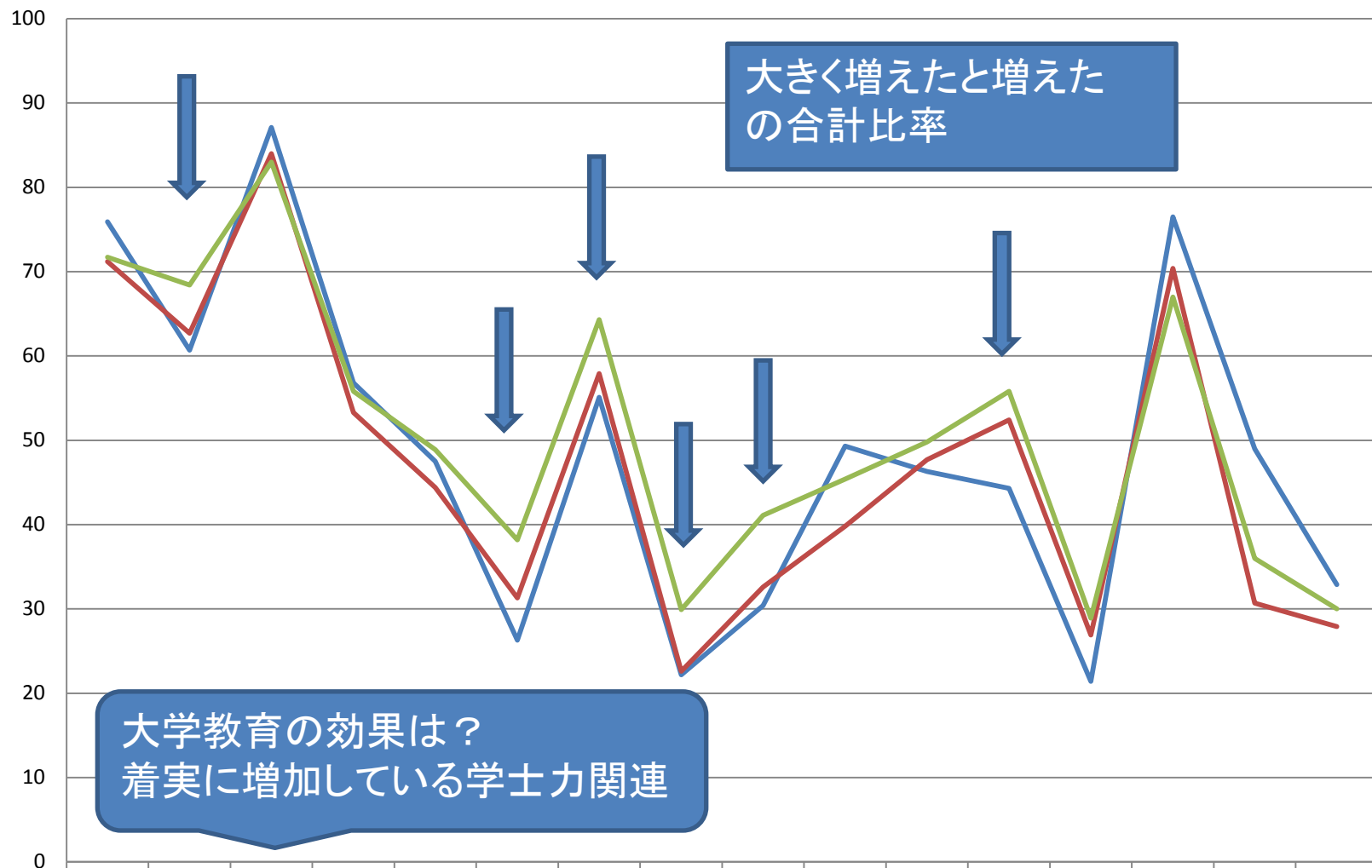


主体的な学修時間の確保はなされていない

ラーニングアウトカムの自己評価

大きく増えた の比率





継続データから何が見える？

- ゆっくりだが着実に学習成果は上がっている
- **何が上昇させている要因なのか？**
- 国際比較は単純ではない。自己評価には国民性、文化性が反映
- ここに国際的標準性のあるアセスメントとリンクさせるとより学習成果の深い部分が見えてくる？
- **直接評価と間接評価の相互補完の必要性**

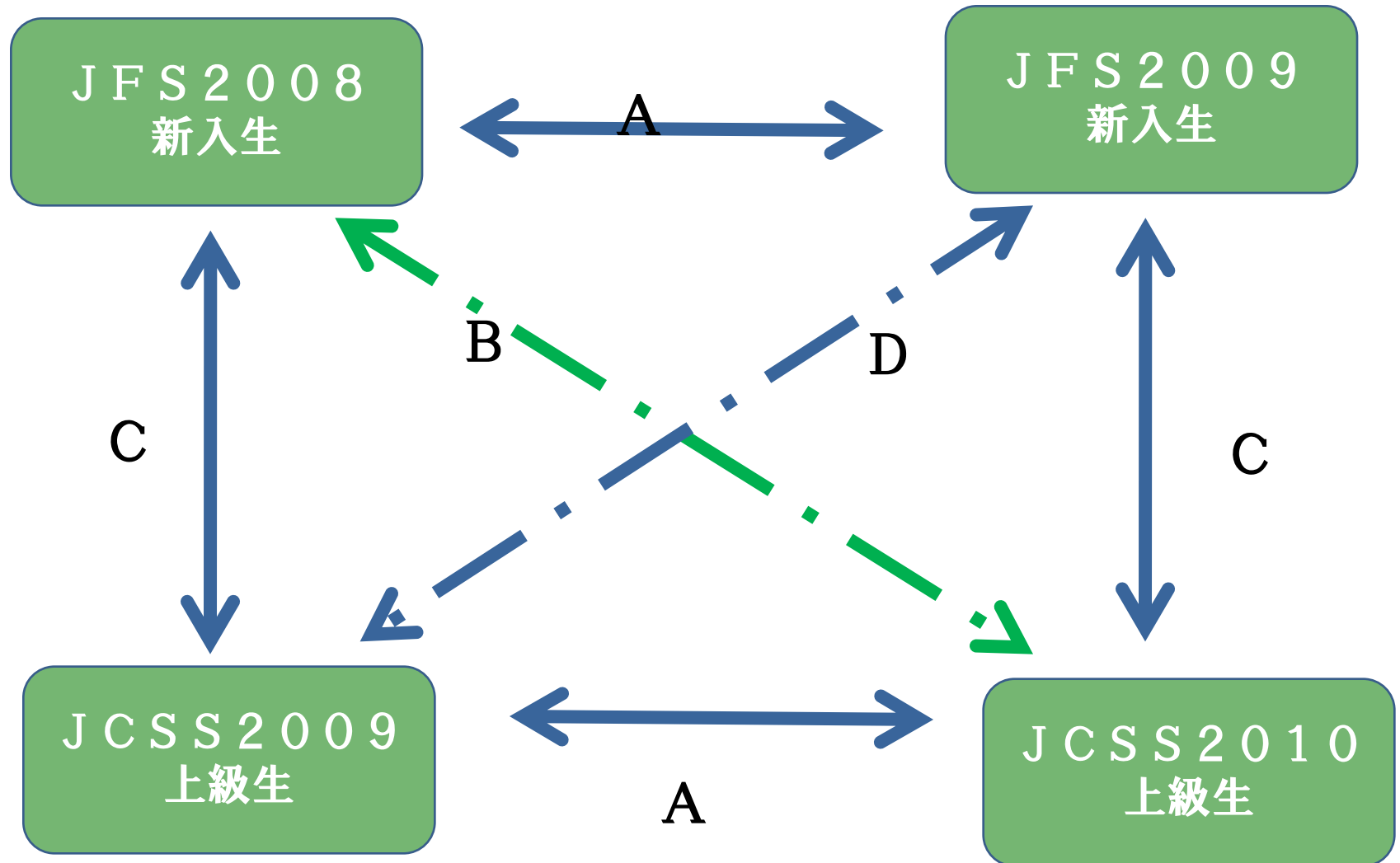
分野別にみる知識・スキルの獲得状況

	人文系		社会科学系		理工農生系		医療系		最高点 F	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
社会的基礎スキル	18.39	2.9	18.04	3	17.89	3.1	18.04	2.9	25	6.27*
古典的教養とスキル	26.5	3.1	25.9	3.5	26.4	3.3	25.6	3.4	35	25.2*
現代的教養とスキル	17.67	2.7	17.24	2.6	16.76	2.5	16.48	2.5	25	63.4*
基礎的学力	6.2	1.4	6.1	1.4	6.7	1.4	6.1	1.3	10	65.4*

- 全般的に高い人文系
- 基礎的学力は理工農生系の獲得状況が高い
- 現代的教養とスキルは 人文系と社会科学系 > 理工農生系と医療系

機関・学部間のパネルデータ分析

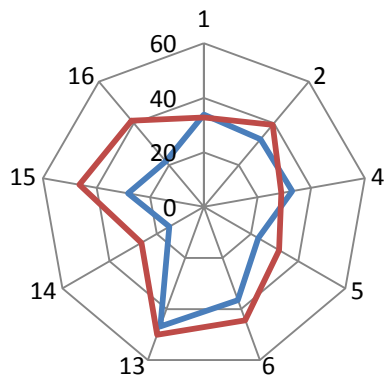
継続型学生調査の分析モデル



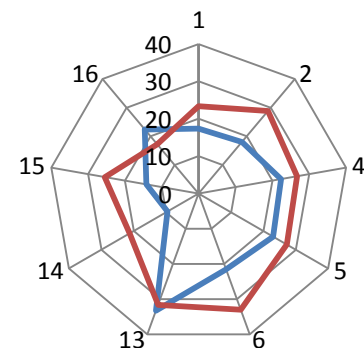
データの概要

	専門分野	比率	偏差値分類	比率	設置形態	比率	学年	比率	性別	比率
JFS2008	人文系	15.0	39 未満	13.3	国立	20.6	1年生	98.9	男性	42.0
3521名	社会科学系	23.1	39以上44未満	26.4	公立	3.9	2・3年生	1.0	女性	58.0
(1年生	理工農生物系	24.4	44以上49未満	12.6	私立	75.5	その他	0.1	合計	100
3482名)	医療系	14.7	49以上52.5未満	37.7	合計	100	合計	100		
	教育系	16.5	52.5以上	10.1						
	家政系	3.9	合計	100						
	芸術系	2.5								
	合計	100								
JCSS2010	人文系	23.4	39 未満	22.5	国立	24.3	1年生	12.0	男性	43.0
2875名	社会科学系	22.1	39以上44未満	18.9	公立	6.9	2年生	11.9	女性	57.0
(3年生以上	理工農生物系	21.1	44以上49未満	13.1	私立	68.8	3・4年生	74.5	合計	100
2142名)	医療系	10.8	49以上52.5未満	33.3	合計	100	その他	1.6		
	教育系	10.7	52.5以上	12.2			合計	100		
	家政系	4.7	合計	100						
	芸術系	7.2								
	合計	100								

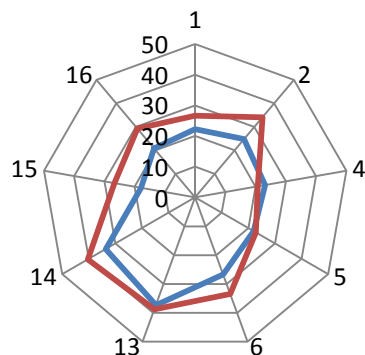
1. 教員と話をする機会
2. 1つの授業を履修する学生数
3. 他の学生と話をする機会
4. 日常生活と授業の内容との関連
5. キャリア計画に対する授業内容の有効性
6. 授業の全体的な質
7. 学生同士の一体感
8. 学生交流の機会
9. 大学での経験全般について
10. 多様な考え方を認め合う雰囲気
11. 教職員による学生支援体制
12. 初年次生対象の教育プログラム内容
13. 共通教育あるいは教養教育授業
14. 自然科学の授業
15. 人文学の授業
16. 社会科学の授業



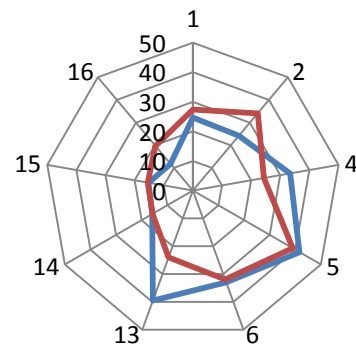
JFS 2008
2008人文系
JCSS 2010
2010人文系



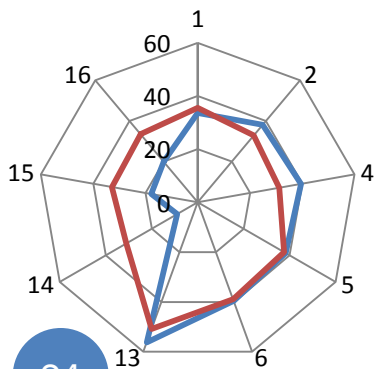
2008社会科学系
2010社会科学系



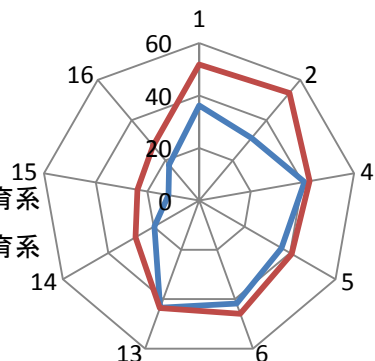
2008理工農生物系
2010理工農生物系



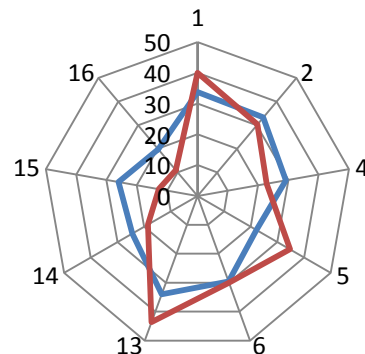
2008医療系
2010医療系



2008教育系
2010教育系

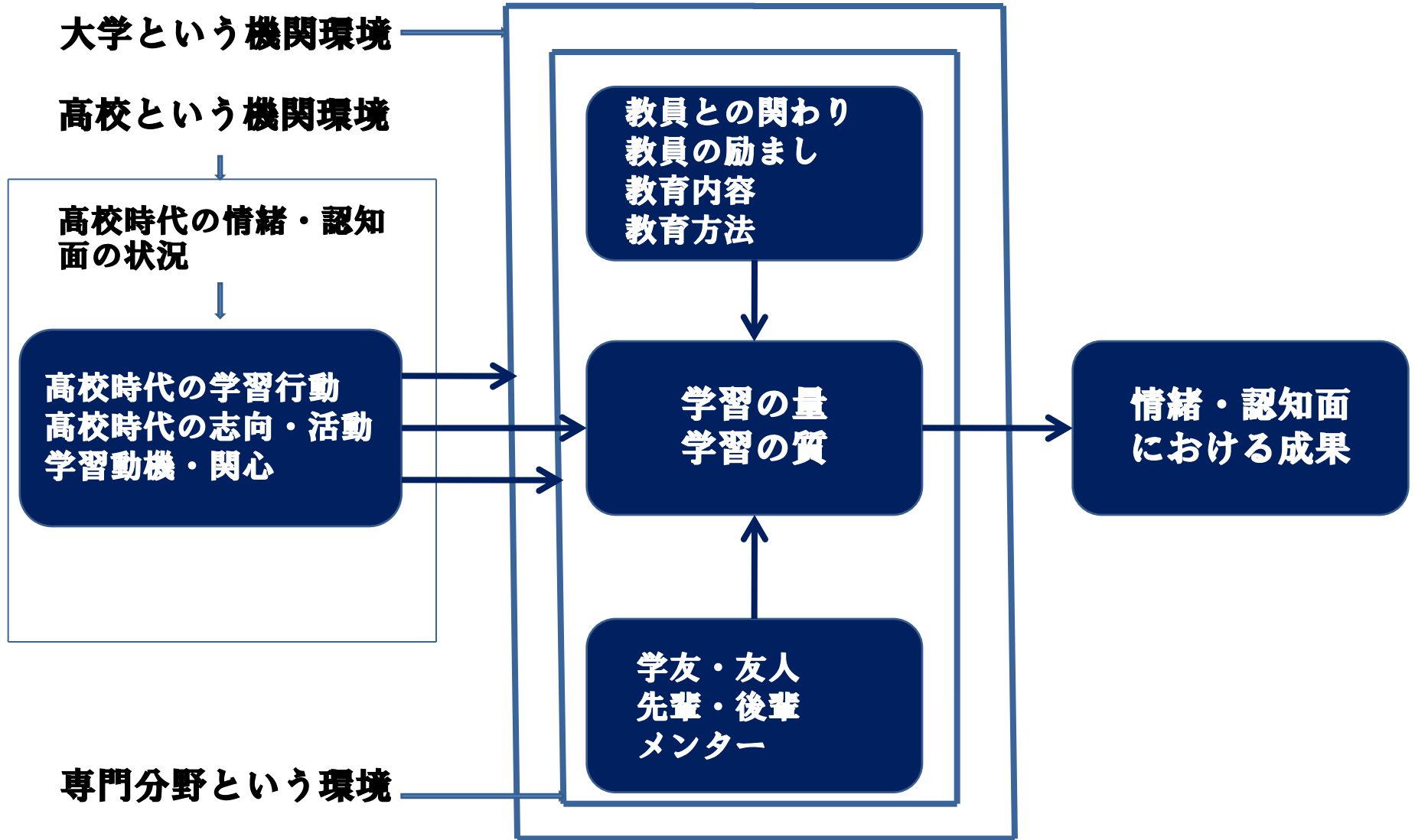


2008家政系
2010家政系



2008芸術系
2010芸術系

教育課程を中心とした機関内環境



JCIRPからわかること：まとめ

- 大規模継続調査の利点：複数の時点、複数の大学での幅広い調査データの蓄積が可能
 1. 継続データから、学修状況の変化の把握が可能
 2. パネルデータ分析から
 - －大学全体パネルデータから、
大学教育満足度は学年によって上昇 1年時と3年次では
3年次の満足度はかなり上昇
 - －専門分野内パネル分析から
大学教育満足度は専門分野によって質的な違いがある
専門 分野（学部）環境の違いが影響
 3. 間接評価によっても学生のエンゲージメントと大学環境
を把握することは可能
- 直接評価と合わせるとさらに効果が高まる

ご静聴ありがとうございました

ryamada@mail.doshisha.ac.jp